ショートストーリー

梨花と友馬

嶋田友馬

これは東京都某市にある都立高校、近辺では北高と呼ばれる学校に通う二人の女子高校生と一つ下の男子高校生の話である。

一人は十和田有紀（とわだゆき）、愛称は「とわちゃん、ユキ（ちゃん）」。もう一人は嶋田梨花（しまだりか）、愛称は「リカ（ちゃん）、梨（り）っちゃん」。二人の家は割と近いが、小中は別々で、高校で初対面だった。そして、梨花には一つ下の弟、友馬（ゆうま）がいた。

有紀と梨花は１年の時、同じクラスだった。そして何度か席替えがあったが、何故かいつも席が近い。腐れ縁なのだろうか。

有紀はショートカットの、大人しそうで知的なイメージ。梨花はロングヘアをリボンでまとめていて、これがまたよく喋る。地域では割とレベルの高い高校で、合格したからにはバカではないのだろうが、この子アホちゃうか？　ってくらいボケをかましてくる。これにいちいち反応していたら私のイメージが・・。有紀はそう思いつつも、梨花のボケに思わずツッコミを入れる。なので「梨花＆有紀」と呼ばれるのに、そう時間はかからなかった。
「もーっ、梨っちゃんのせいで私のイメージ丸崩れだよ」
有紀はそう言いながらも、楽しそうに梨花に付き合っていた。男子からは二人とも黙ってれば可愛いのに・・なんて思われていたようだが、そんなのお構いなし。梨花はそもそもお喋りだし、有紀は若干引っ込み思案なところがあり、なんだかんだですぐに友達ができたことが嬉しかった。

あっという間に１年が過ぎ、二人は何事もなく２年に進級。ここでもまた同じクラスになった。一説には先生が、この名コンビは離したらアカンって、言ったとか言わなかったとか。そして、梨花の弟・友馬もこの学校に進学してきた。

有紀と梨花は、既に親友と呼べる仲になっていた。有紀から見たら梨花は、可愛くて明るくて、そしてアホなことばっか言ってるけど地頭は良い（そして大好き）。梨花から見たら有紀は、可愛くて優しくて思いやりがあって、そして頭も良くてうらやましい（けど大好き）。二人は共に、学年では上位クラスをキープしていて、この学校でその位置は、難関私立も十分に狙えるレベルである。

二人は相変わらず、休み時間には女子トーク、そして時々漫才ライブを披露し、クラスでも人気者だった。中には良く思っていない奴もいたがそれは誰にでもいる。

高２ともなれば、大学受験を視野に、目標を定める時期。二人はそれぞれ、国立、あるいは難関私立が志望で、模試の評価では十分合格が狙え、さらに努力すればほぼ間違いなしというレベル。二人は互いにライバル視しつつも、
「一緒の大学行こうねー」
と、仲の良さは相変わらず。だから、二人で合格できるように、勉学に励んでいた。ところで有紀と梨花は時々互いの家に遊びに行ったりしていたのだが、有紀が来ている間友馬は部屋に引っ込んでいたし、学校でも特に梨花と友馬が二人でいる機会はなかったので、有紀は梨花に弟がいることは知っていたものの、実際に友馬と会ったことはなかった。

中間テスト、期末テストも終え、有紀は学年 10 位以内、梨花も 20 位以内をキープ。夏休みに突入すると、夏期講習などに通いつつ、時々二人で遊んだりと、息抜きもしていた。ただ、有紀は梨花の中に、少しだけ暗い影が差していたことを、気にかけていた。

そして夏休みが過ぎ、時は秋の彼岸。梨花・友馬の両親は、出かける準備をしていた。そして父・一馬（かずま）は
「梨花、友馬、今日はちょっと母さんと出かけるから、留守番頼むな」
と言い、母・絵里（えり）と共に出かけようとしたところ、梨花も
「私もちょっと用事あるから」
と友馬に言って、外へ出て行った。そして両親に
「私も行っていい？」
と言う。
「いや、友人のお墓参りだからさ」
一馬がそう言うと梨花はすかさず
「それって、私のパパとママの・・でしょう？」
と返した。絵里は
「梨花、あなた覚えていたの？」
と驚いたように言った。梨花は黙って頷いた。

そう、梨花は一馬・絵里夫妻の本当の子ではない。一馬の親友だった松本誠一（せいいち）と、妻・貴子（たかこ）の間にできた子であった。

一馬と誠一は同じ大学に通い、親しくなり、一緒に勉強したり遊んだりした。卒業後は別々の道に進んだが、頻繁に連絡を取り、時々飲んでは愚痴をこぼしたり励まし合ったり、そんな仲だった。そして、何という偶然か、互いに結婚し、新居を構える段になり、同じ街に引っ越してきて、それからは互いの妻同士も仲良くなり、家族ぐるみの付き合いが始まった。そして誠一と貴子の間には一足先に梨花を授かり、それから１年と少し経った時、一馬と絵里の間に友馬が授かった。

３歳くらいになった梨花は、友馬のことをよく可愛がった。そして少しずつ言葉を覚えた友馬も、
「りーちゃん、りーちゃん」
って、いつも梨花の後をついていった。梨花も一馬と絵里を嶋田のおじちゃん、おばちゃんと呼んで懐いていた。一馬、絵里、誠一、貴子は、その様子を見ていつも笑顔が絶えなかった。だが、その幸せな一時は、長く続かなかった。

梨花が４歳になる直前、誠一と貴子の二人は所用を済ませ、車で保育園に梨花を迎えに行く途中、信号待ちの際、脇見運転のトラックに突っ込まれ、前のトラックとの間に挟まれてしまった。救急搬送されたが貴子は即死状態、誠一も予断を許さない状況だった。

真っ先に病院に駆けつけたのは一馬だった。スタッフが誠一の携帯電話から発信・

着信履歴が多かった一馬に連絡をくれたのであった。一馬は病院に向かう途中、絵里に電話をかけ、二人が事故にあったことを伝え、
「梨花ちゃんを保育園に迎えに行ってすぐに市立総合病院に向かってくれ」
と言った。絵里はすぐに友馬を車に乗せ、保育園に向かった。本来保育園は家族・親族にしか引き渡さないが､園長は絵里が梨花の両親と親しかったことは知っていたし、そういう事情ならということで梨花を引き取り、すぐに病院へと向かった。だが・・

誠一は何度も
「梨花・・貴子・・」
と、うわごとのように名前を呼んでいた。だがもういつ事切れてもおかしくない状態だった。そこで医師は一馬を呼んだ。誠一は途切れ途切れに
「か　ず　ま　、　り　か　を　、り　か　　を　た　　の　　む」
と言い残し、誠一は永遠の旅に出てしまった。梨花は間に合わなかった。

安置された二人の遺体は、あれだけひどい事故であった割に綺麗な状態だった。だが、もう言葉を発しない、動かない、梨花を抱きしめることもできない。梨花は最初戸惑い
「ねえ、パパ、ママ、何でおねんねしてるの？　ねえ、パパ、ママ、ねえ・・」
そう何度も呼びかけた。だが、察したのか一馬に
「ねえ、嶋田のおじちゃん、パパとママ、しんじゃった　の？」
と言った。それを聞いた一馬は、ただただ、梨花を抱きしめてあげることしかできなかった。梨花は声を上げて泣き続けた。絵里もまた、梨花を抱きしめ、背中をさすってあげることしかできなかった。友馬は何も知らず、すやすやと眠っていた。

一馬と絵里は梨花を家に連れて帰り、当面世話をすることを決めた。そして、厄介なのはそこからだった。誠一は高崎の旧家の長男・跡取りであった。そして貴子も京都の名家の長女で、婿を取って後を継ぐことを強いられた。それぞれに親が勝手に決めた相手もいる。だが、二人はそんな古くさい決めごとに縛られず、惹かれあい、愛し合って結婚した。当然ながら双方とも勘当。高崎の家は誠一の弟が、京都の家は貴子の妹が婿を取って後を継ぐことになったが、二人にもやりたいことはあった。だから誠一の弟も、貴子の妹も、二人のことを良く思っていなかった。親戚筋も本家に遠慮して、誰も手を上げない。そう、遺体を引き取る親族も、梨花を引き取る親族もいなかったのだ。

一馬はそういう事情を知っていたので、絵里と話し合い、二人を荼毘に付し、簡素な葬儀をし、そして梨花を引き取った。墓も後に二人が立てた。梨花は聡い子であったため、しばらく沈んでいたのだが、ほどなく一馬と絵里をパパ、ママと呼ぶようになったし、いつも甲斐甲斐しく友馬のことを見てくれた。

それから時が経って､友馬が小学校に通うようになる｡そういえばいつの頃からか、梨花はパパ、ママではなくお父さん、お母さんと呼ぶようになっていた。ちなみに梨花は１月生まれの山羊座、そして友馬は１年と少し後、３月生まれの牡羊座。３月末の生まれだから、同じ学年でも４月生まれとは体格差があって、友馬は時々いじめられた。すると１年上の梨花が乗り込んできて、友馬をいじめた小僧をぶっ小突いて泣かせ、絵里は何度か呼び出された。そして梨花を叱った。しかし、絵里は何となく、

梨花は梨花なりに、私たちに気を遣っているのではないかと、それで友馬のことを守ろうとしてくれているのではないかと感じていた。だから叱った後は、
「友馬のこと守ってくれてありがとう」
と、梨花のことを気遣った。そんなこともあって、一馬は梨花に一度聞いたことがある。
「なあ、梨花、パパとママのこと、覚えてるか？」
すると梨花は一馬と絵里の顔を見ながら
「えっ、何？何？　パパと　ママって、何？　覚えてるって、何のこと？」
と答えた。それを聞いて一馬も絵里も、本当の両親のことは覚えていないか、ショックで忘れているのだろうと思っていたのである。今から考えればそれも演技だったのか？　だとしたら本当に聡い子だ。そういえば梨花がよく喋るのも、友馬をいつも構ってくれていたからだった。

友馬が高学年になって生意気になっても、梨花はそれを飲み込んで相手をしてくれていたし、時々叩かれたり引っかかれたりもしたが、
「これくらい平気だから」
と言って、決して友馬に怒ったりしなかった。中学生になって友馬が無口になっていくと、梨花の方からよく絡みに行った。友馬がうざがってもそうしていた。その内友馬は照れくさそうに
「姉ちゃん」
って時々声をかけるようになり、高校生になった今は、互いに軽く悪口も飛ばして笑いながら口論したりと、まあまあ上手くやっている。そういえばひどい姉弟(きょうだい)喧嘩は記憶にないし、梨花が一馬や絵里に口応えしたり反抗した記憶もない。「そうか。そのことを分かっていたから梨花は、何もかも飲み込んで・・」。二人はそう悟った。もっと我が儘を言ってくれても良かったのに・・。梨花が素直ないい子に育ったのは私たちへの気遣いもあったのだろうが、友馬が素直ないい子に育ったのは間違いなく梨花のおかげだ。一馬も絵里もそう思っていた。

墓所まで小一時間、車を走らせながら一馬は梨花に、本当の両親のことや、辛いかもしれないがと、自分たちが引き取った経緯も梨花に話した。そして墓地の少し奥まったところにある二人の墓の前に来た。

松本誠一・貴子の墓を前に、梨花は手を合わせ、そして言った。
「パパ、ママ、私、こんなに元気に育ったよ。ずっと見守っていてくれてありがとう。それもこれも、私を引き取って育ててくれたお父さん、お母さんのおかげだよ。そして、こんな良い友達を持ったパパとママのおかげでもあるよね。ありがとう・・本当にありがとう」
一緒に手を合わせていた一馬と絵里は、涙を浮かべながら、その言葉を聞いていた。そうか。梨花が私たちのことをお父さん、お母さんと呼ぶようになったのはそういうことかと察した。そして梨花は続けた。
「ごめんね、ずっと来られなくて。本当は何となく覚えてた。でも、言えなくて。だって、お父さんとお母さん、私に本当に良くしてくれたもん。変な親戚とかに引き取られなくて良かった。お父さんとお母さんで本当に良かった。私がこんなに素直で可愛く育ったのもお父さんとお母さんのおかげだもん。あっ、可愛いは余計か。だから、

安心して。パパ、ママ、私を生んでくれてありがとうね」
そう言うと、声を上げて泣いた。そして一馬と絵里もまた、涙が止まらなかった。

丁度その時、少し離れた区画に、お参りに来ていた家族がいた。えっ！？　梨っちゃん？？　そう、そこに来ていたのは有紀とその両親だった。で、有紀には梨花が泣きながらお墓に向かって話しかけている言葉が聞こえ、何となくであるが、梨花の生い立ちを察した。梨っちゃん、本当の子じゃないってこと？　でもまあ、関係ないか。梨っちゃんは梨っちゃんだし。それにしてもあんなに明るい梨っちゃんがそんな事抱えていたなんて。そうか、最近ちょっと暗かったのはその所為なのかな？　そう思った有紀は、その手の話を梨花には絶対しないって思った。その時は・・。

そして年は明けて２月。バレンタインだなんて浮かれてるクラスメイトも何人かいたが、有紀も梨花も浮かれることはなかった。ただ、梨花は友馬に
「これ、あげる」
と言って、チョコレートを手渡した。
「どうせもらえなかったでしょ？」
「悪いかよ」
実は友馬の鞄の中には、いくつかのチョコが入っていたのだが、それは黙っていた。
「あっ、それ、10 倍返しだからね」
そう言うと梨花は、自分の部屋へと消えていった。

そしてまた一月余りが過ぎたある大雪の夕方。「雪はもうやだな、３月なのに・・」とため息をつきながら、有紀は傘を差してゆっくりと歩いていた。すると、後ろから小走りで駆けてきた少年が、有紀の横を通り過ぎようとしていた。
「ねえ」
有紀は少年に声をかけた。
「こんな雪の中、走ったら転んじゃうよ。傘、入れたげるから」
少年は立ち止まり、戸惑いながら
「えっ、そんな、いいですから」
と答えたが、有紀は
「いいから」
と、少年に傘をさしかけ、そして二人でゆっくり歩いて行った。少年は照れていたし、有紀だって同じくらいの年頃の男子と相合い傘なんて初めてだから、二人はあまり会話もなく、途切れ途切れだった。
「あ、あの、僕、友馬っていいます。北高１年で・・」
「えっ、君も北高？　私、２年の有紀。１つお姉さんだね」
「あっ・・・」
「何？」
「いえ、何でも」
友馬は思った。２年生ってことは姉ちゃんのこと知っているかも。でも、あのバカ姉ちゃんだからなぁ・・・と。そうこうしているうち、有紀の家の近くにさしかかった。
「あたし、こっちだけど友馬君は？」
「えっと、真っ直ぐ行って 10 分くらいです」
「じゃあ、傘、持って行きなよ。あたしはもうすぐ近くだし、これでいいから」
と言い、フードを被って右へと歩いて行った。友馬は

「あっ、ありがとうございます」
とお礼を言い、自宅へと歩いて行った。

家に帰ると梨花が駆け寄ってきた。
「外大雪じゃない。大丈夫だった？」
すると友馬は照れたように
「うん。綺麗なお姉さんに、傘、入れてもらって、借りてきて」
と言うと、梨花はすかさず茶化した。
「へぇー、美女と相合い傘ぁ？　やるねぇー」
「ちょっと、姉ちゃん！」
友馬は少し怒ったが、梨花はさらに
「ねえ、そんなに綺麗だった？　お姉ちゃんより？」
「ああ。それに、優しそうな人だった。誰かさんみたいに意地悪じゃなくてさ」
そう言う友馬の顔は、赤くなっていた。
「あーっ、照れてる、かーわい」
「うるさいなぁ、あっち行ってよ！」
「はいはーい」
そう言って梨花は、友馬が借りてきた傘の水を切り、干そうとしたが、あれ？　この傘・・そっか。梨花はちょっと薄笑いを浮かべた。

　数日後、もう春休み。梨花は有紀と図書館で勉強した後、
「友馬、ちょっと図書館の前に来て。あっ、こないだ借りた傘、持って来な」
と呼び出した。程なくして友馬の姿が見えると
「おーい、こっちこっち」
と、梨花は手招きした。有紀はその姿を見て思わず両手を口元に当てた。友馬が二人の前に来ると
「ゆ、友馬君？」
「えっ、有紀さん？　何で？」
二人とも驚いた様子だった。
「友馬、私の親友で十和田有紀。私はとわちゃんって呼んでる。で、とわちゃん、これ、弟の友馬」
「えっ！　梨っちゃんの弟君？？？」
「有紀さんって、姉ちゃんの親友？？？」
「そうだよ。そうそう、家にも何度か来てたんだよ。友馬、いつも部屋に引っ込んでたから知らなかっただけ」
有紀も友馬も、頬を赤らめて、二人して俯いていた。恥ずかしそうに。
「ほら、友馬、傘、返しなさいよ」
梨花がそう促すと、
「あっ、あの時はどうも、ありがとうございました」
と言って有紀に傘を手渡した。有紀は
「ど、どういたしまして」
と言いながら受け取った。
「じゃあ、帰ろっか。それとも、お二人このままデートでもする？」
梨花がにやにやしながらそう言うと、二人同時に

「ちょっと！　梨っちゃん！／姉ちゃん！」
すると梨花は
「おーっ、息ピッタリ！」
そう茶化したが、まあ、今日の所はそれぞれ家路についた。

　家に着くと早速、
「姉ちゃん、気づいてたのかよ、傘貸してくれたのが有紀さんだって」
「うん。だってあの傘、とわちゃんがいつも差してたやつだもん」
「だったらさ、姉ちゃんが持っていってくれれば良かっただろ」
「そうだねー。でもさ、そのおかげでとわちゃんと”お知り合い”になれたんだからさ、ちょっとは私に感謝しなよ」
「そうやって遊んでないか？」
「だって友馬、赤くなってたじゃない。とわちゃんだって。ひょんな事から恋が始まるってのもあるんじゃない？」
「俺はそんな！」
「ほら、また赤くなってる」
「・・・」
友馬は無言のまま部屋へと消えていった。どうやら友馬は、有紀に恋心を抱き始めたらしい。そして、程なく清らかな交際へと発展していった。ただ、それからというもの、梨花の様子が少しずつおかしくなっていった。

　春休みはあっという間に終わり、有紀と梨花は３年生に、友馬は２年生に進級した。そしてまた、有紀と梨花は同じクラスになったが、さすがに高３は受験への追い込み。相変わらず二人は仲良かったものの、休み時間はおどけている暇もないし、そもそもあれは、梨花のお馬鹿トークが引き金だったので、今はそれがなりを潜めていた。有紀は「梨っちゃんももう余裕がないって事かな？」と、その時は軽く考えていた。しかし・・

　ある日、有紀が友馬と二人で帰ると、何か物陰から視線を感じる。それを有紀が目ざとく見つけた。
「友馬君、ほら、あそこ・・、あれで隠れているつもりらしいよ」
「・・姉ちゃん・・」
梨花が後を付けて観察していたようだ。

　そしてゴールデンウイーク。受験生は何かと忙しいが、一日くらいならと、有紀と友馬は遊園地へ。しかし・・そこに迷彩服を着た怪しい人物が・・
「遊園地で迷彩服なんてかえって目立つだろう、バカが」
友馬は目を覆いながら呆れたように言った。そして・・

　友馬は帰宅後、梨花を怒鳴りつけた。
「いい加減にしてくれよ！　恥ずかしいったらありゃしない」
梨花は少しの間俯いて、そして言った。
「ごめん、もうやめる。でも、一つだけはっきりさせておきたい。だから、正直に答えて」

「何だよ」
「とわちゃんのこと、好き・・なんだよね」
「えっと、それは・・」
「はっきりして！　言っとくけど、とわちゃんといい加減な気持ちで付き合おうってなら、私、絶対に許さないからね」
「・・先輩のこと、まだ好きかどうか、はっきり分からない。けど、いい加減な気持ちじゃないから。それだけは信じてくれよ」
「・・分かった。ごめんね」
梨花はそう言うと自分の部屋へと引っ込んでいった。そして本当の両親の写真（一馬から受け取った）を前にしてこう呟いた。
「パパ、ママ、これでいいんだよね」
その表情は、随分と思い詰めていたようだった。
そして友馬は、梨花のおかしな行動を有紀に謝った。
「先輩との付き合いがいい加減なものだったら許さないって言われましたよ。だから、姉なりに先輩のことを心配していたんじゃないかと・・」
「そうなんだ。でも、友馬君がいい加減な気持ちじゃないって事はあたしも分かってるから。・・って、梨っちゃんに言っといてね」
そうは言いながらも有紀は、（本当に、そうなの？　梨っちゃん）と、心の中で思っていた。

　それからというもの・・
「姉ちゃん　姉ちゃん！　姉ちゃんってば！」
「あ、あ、友馬、何？」
「箸、逆に持ってる」

「梨っちゃん　梨っちゃん！　梨花ーっ！」
「うわ、びっくりした」
「びっくりしたじゃないわよ。何度も呼んでるのに。梨っちゃん、最近変だよ。いつもぼーっとしてさ。徹夜勉強のしすぎじゃないの？」
「ごめん、ちょっと考え事してて・・」

　というように、いつも思い詰めたような表情で、何を問いかけても上の空。そんなことが増えていった。友馬も有紀も、そんな梨花を心配していた。そして有紀はその時既に、寝不足や受験のプレッシャー以外にもう一つ理由があることを何となく察していた。

　そしてその後の三者面談で、梨花はとんでもないことを言い出した。それには担任の教師も驚きの声を上げた。
「ええっ！　京都大学理学部ぅ！？」
「はい」
それには絵里も驚いて梨花を見つめた。
「嶋田ぁ、お前本気か？　京大って言えば、日本の最高峰だぞ。お前の今の学力じゃ足りないって」
「分かってます。でも、私は挑戦したいんです」

「・・なあ、嶋田なら W 大でも KO 大でも十分狙えるって。国立だって東大京大はともかくさ、なあ、考え直さないか？」
「いえ、京大一本で」
「・・なあ、何で京大なんだよ」
「それは・・興味深い研究をしているからです。私もそういう事に関わりたくて」
「ああ、確かに京大は最先端の研究をしているけどな。お母さんからも何とか言って下さいよ。京大一本は、失礼ながら無謀ですよ。いえ、挑戦するのはいいことですが、せめてもう一校」
それを受けて絵里は梨花に言った。
「滑り止めは受けないの？」
「うん」
「どうして？」
「・・背水の陣。退路を断って、勉強に打ち込みたいから」
「本気なの？」
「本気」
「・・・分かった。先生、この子の好きにさせてあげてください」
「いいんですか？」
「はい。この子、一度言い出したら聞かないので。で、梨花、分かってるよね」
「うん。落ちたら１年間バイトしながら勉強して、また受ける。受かるまで何度も」
「・・それなら私は何も言うことはない。先生、どうかお願いします」
そう言って絵里は深々と頭を下げた。
「・・分かりました。こちらとしても梨花さんの希望が叶うよう、最善は尽くします」

面談が終わり、絵里と梨花が会話を交わす。
「梨花、本当にいいのね」
「うん」
「受験のことじゃなくって」
「えっ？」
「家を出ようっていうなら、私は反対しないよ。支援だってする。梨花にはもう、たくさんのもの、貰っているからさ」
「えっ？　何？　何？」
「・・・何でもないよ」
どうやら絵里も、梨花の想いに気づいているようだった。「そうだよね。あなた、ずっと気にかけてくれていたもんね。私たちもちゃんと向き合わなければならないかもね」。絵里はそう考えていた。「それにしても極端なことを・・」。絵里はため息をついた。だが、「そういえば誠一さん、貴子さんも無鉄砲なことをして一緒になったんだもんね。血は争えないってことかな」。そう考えると絵里は妙に納得した。

　梨花が京大一本に絞る！　そのニュースは数日で知れ渡った。
「嶋田さーん、今のお気持ちは？」
「抱負を一言」
「爆死確定っすかぁ？」
そう茶化す声やひそひそ話が教室中に溢れた。すると、有紀が机を”バン！”と叩いて言った。
「あのー！　梨っちゃんは本気なの。やるって言ったらやるの。だから、最初からダ

メだって決めつけないで！　あたしは梨っちゃんを信じる！」
その一言で教室は静まりかえる。すると、クラスメイトの有馬さくらが唐突に
「乗った。単勝一本勝負！　私も梨花ちゃんの合格、信じる。みんなが負ける方に賭けるって言うなら、私が全部引き受けるよ」
と、梨花を応援する声を挙げた。
「京大狙うとなるともっと頑張らないとだけど、頑張りすぎてもダメ。リラックスしないといい脚は使えないから。あとはペース配分。勝負は残り３ハロンから最後の直線。捲れ～！、差せ～！　・・・・・・って、あれ？？？」
（一同、目が点）
さくらは無類の競馬好き。何でも競馬に結びつけたりする。これで学年上位はキープしてるってんだからよく分からない子だ。でも、言い得て妙だ。
「思いっきりスベってるよ」
有紀がそう言うとさくらは
「あちゃー、またやっちゃったぁ」
と凹んだ。

　何かよく分からない展開だが、こうしてさくらとも仲良くなれた。梨花の挑戦は確かに無謀かもしれない。相変わらず「無理だろう」という声もちらほらと聞こえてくる。だがこの先、梨花はそれらの雑音を、実力でねじ伏せていくことになる。しかし、有紀、さくらにとっては心配要素でもあった。梨花がだいぶ無理をしているようだったから。
「梨っちゃん、ちゃんと寝てる？」
「調教（勉強）のしすぎで故障（体調不良）でもしたら元も子もないぞ。たまには放牧（息抜き）も必要だぞ」
だがそんな心配もよそに、梨花は中間テストで順位を一気に上げた。

　掲示板には人だかりができ、皆順位に一喜一憂している。
「梨っちゃん４位！　一気に上げたね」
有紀は今回６位。初めて抜かれた形だが、悔しがる様子はない。だが梨花は、
「まだまだ。京大はもっと上げていかないと」
と、満足していない模様。
「数学の４問目と物理の２問目、間違えたし、数学は１問、△だった。やり方は合ってたのに計算間違えて・・悔しい」
そんな話をしていると唐突に、隣で掲示板を見ていた女子生徒が呟くように言った。
「数学の４問目と物理の２問目は問題をざっと読んで解答したら間違える。じっくり読んで問題の意図を正しく理解しないとダメなやつ。読解力も試されている。あと、マークシートに△は無いからケアレスミスには気をつけて。化学や社会系は満点近く取れるようだから国語を重点的にやるのが近いかも。あと英語ね」
「えっ？」
「通りすがりのネコ。じゃあ」
「あの・・ありがとう」
「別に。私は堅苦しいのが嫌で W 大志望だから。京大でしょう？　だったら別にライバルじゃないし。それどころか２学期の中間あたりではボクを蹴落としているくらいじゃないと厳しいよ。だからって焦りすぎてもダメだけどね。ま、頑張って」

そう言うと、去っていった。
「あの子って・・・？」
するとさくらが、
「ずっと学年トップの茜(あかね)ちゃん。猫好きだからみんなアカネコちゃんって呼んでる」
「あの子が・・」
「あんな感じだけど、仲良くなったら意外と人懐っこかったりするんだよね。ああ、お馬さんにも結構詳しいから、彼女。だから私とは結構喋るんだ」

茜のアドバイスもあってか、1学期の期末テストではもう一つ順位を上げた梨花であったが、模試では調子を崩し、京大理学部はC判定。これがさらに梨花の焦りを誘ってしまった。夏休みに入っても夏期講習などで追い込み。言っても聞かないから、有紀とさくらが強制連行して息抜きをするという状態だった。
「梨花ちゃんにアカネコちゃんからの伝言。しっかり眠らないとせっかく勉強した事も記憶に残らないし、寝不足が続いて体壊していい訳がない、だって。だからさ、ちゃんと寝ようよ」
さくらがそう諭すが、梨花はイラッとした様子だ。
「分かってる！」
「・・・梨花・・ちゃん？」
しばらく沈黙の後
「・・・私、・・何やってんだ？　さくらちゃん、心配して言ってくれてるのに・・ゴメン」
「梨っちゃん、分かっているなら、ちょっと落ち着こうか」
「うん」
そう言ったものの、梨花は何となく上の空だった。梨花がそんな調子では、息抜きもその日は中止。二人で梨花を家まで送り、その帰り、有紀とさくらは心配そうに話していた。
「有紀ちゃん、まずいよ、これ」
「何とかしないと・・だよね」
しばらくの沈黙の後さくらが、
「ねえ、睡眠改善薬でも飲まそうか。昔の強烈に眠くなる花粉症の薬を応用したってやつ」
と言い出した。
「力業の荒療治か」
「問題はどうやって飲ませるか・・だけど」
二人でそんな話が交わされたが有紀は、
「ねえ、やめよう、それ。飲んで布団に入ってくれるなら良いと思うけど、梨っちゃんのことだからそうしないと思う。そんなの飲んで変な時に寝落ちして事故でも起こされたら困る」
そう言った。
「・・それもそうだね」
「・・・あたしが弟君に話してみるよ。梨っちゃん、弟君の言うことなら聞くかもだし」
有紀は、その手はあまり使いたくなかったが、これまで色々言ってきたが全然聞き入れず、もう打つ手がない。友馬君に頼るしか・・そう思いケータイを手にした。

「あっ、友馬君？　実は、梨っちゃんのことなんだけど・・」
有紀が電話終えるとさくらは・・
「有紀ちゃんって弟君とも仲いいんだ」
と、軽い気持ちで聞いた。それに対し有紀はちょっと焦りながらも、
「あたし時々、梨っちゃん家に遊びに行ってたからさ」
と答えた。
「ふーん」
さくらはそれ以上のことは特段思っていない様子。そういう面ではちょっと鈍い。

　そしてその三日後の夜の事だった。梨花は相変わらず寝不足で、夕食の後、椅子から立とうとした際に立ちくらみを起こし、そのままぺたっと椅子に座り込んだ。
絵里は梨花に強く言った。
「ちょっと、梨花、あんた大丈夫なの？」
「大丈夫、これくらい。こんな程度で休んでられないから」
「私は無理しろなんて言ってないわよ」
「お母さんは黙ってて」
「梨花！」
絵里がそう言った直後、友馬が梨花の左頬をひっぱたいた。
「何するのよ！」
「いい加減にしろよ！　姉ちゃんのこと心配してるのに母さんに当たってさ。受験勉強が大変なのは分かるけどさ､それじゃ姉ちゃん体壊しちまうじゃねえかよ！　俺は、そんなの嫌だ。無駄に元気でさ、バカみたいに笑っててさ、いつも俺のこといじり倒してさ。俺はそんな姉ちゃんでいて欲しいんだよ。今の姉ちゃんなんか見たくないんだよ」
梨花は友馬をしばらくじっと見つめ、そして
「・・・・・寝る」
と一言。友馬に叩かれたのがショックだったのか、それとも友馬が心配してくれたのが嬉しかったのか。梨花はとぼとぼと部屋に戻り、どうやらベッドに潜り込んでしばらく泣いて、そのまま眠りについたようだ。絵里は、友馬が梨花のことをあんなに心配してくれたことに感謝していた。
「友馬、ありがとね」
「ったく、姉ちゃん、極端なんだよ」
「今のが、これまでで一番の姉弟喧嘩だね。でもいい姉弟喧嘩だった」
「子供の頃、よく姉ちゃんを叩いてた記憶あるんだけど」
「あれは喧嘩じゃないわよ。だって梨花、いつだって友馬を受け止めて、一度も怒ったこと無かったから」
「そうだっけ？」
「そうよ。あんなだけど本当は優しいんだから」
「・・・それは・・・知ってる」
そんなわけで、友馬から有紀に、姉ちゃんを叱ったこと、それ以降はそれなりに睡眠が取れていることを伝えた。やっぱり一番の薬は友馬君だったかと、有紀は思った。でもそれは・・それで良かったのかな？・・有紀は少々複雑な思いでいた。

　夏休みが明けて２学期の初め。梨花は二人に謝った。

「ごめんね、心配かけちゃったね」
「梨っちゃんの悪い癖。突っ走っちゃってさ」
「そうだぞ。あんなペースじゃ逃げ残れないぞ」
「はい、反省してます」
梨花の顔色は随分良くなっていた。以前のような明るさは感じられず、強烈なボケも完全になりを潜めていたが、体調自体は回復していたようで、その点は二人とも安心した。だが、有紀もさくらも、梨花のことばかり気にしてはいられない。三人はそれぞれ目標に向かって進んだ。梨花は相変わらず怖いくらい真剣な表情で勉強をしていたが、風呂上がりなどはリラックスした表情で過ごし、時々友馬の勉強も見てやった。完全ではないが、だいぶ元の梨花に戻りつつあった。

そして迎えた中間試験。有紀はトップテンをキープ、そしてさくらも初のトップテン入り。そして梨花は・・総合得点で茜に３点差の２位。蹴落とすまではいかなかったが、茜もその時は過去最高点を叩き出していたので、実質追いついたと言って良い。そして、その後の模試で、梨花は京大理学部、初の B 判定を獲得。適当に書いておいた第２，第３志望欄の難関私立大学は共に堂々の A 判定。梨花の学力は飛躍的に向上していた。それには担任も「これはひょっとしたら」と、驚きを隠せなかった。そして、「そういえば十和田と有馬がよくサポートしていたからなあ。持つべきものは良き友か。私たちが指導とか説教するよりも、良く効くなぁ」と、噛みしめていた。ただ、弟の力が加わっていたことはもちろん知らない。

その後の期末テストも同様の結果。梨花はついに茜を抜くことはできなかったが、安定した高得点を取れるようになっており、手応えは感じていた。それに、北高で学年２位は、東大・京大合格も十分可能性があるレベルなのである。
そしてすぐに冬休み。３年生は年明け、登校しなくなるため、しばしの別れである。
「いよいよだね、梨っちゃん、さくらちゃん」
「うん。・・ありがとうね、とわちゃん、さくらちゃん。二人にはほんと、迷惑かけちゃって。うん、私はもう大丈夫だから」
「そうそう、アカネコちゃんに梨花ちゃんへの伝言聞きに言ったらさ、何もないよ、あとは分かってるでしょ、体調管理と、焦らず今の実力を発揮するだけだって事くらい・・だって」
「それ、きっと梨っちゃんだけでなくて、さくらちゃんにも、あたしにも言ってくれてるんだと思う」
「だね」
そしてムードメーカー（？）のさくらはまた
「最後の直線！　みんなまとめて差し切るぞ～・・・・あれ、オーは？？？」
「・・またスベってるよ・・ねえ、しばらくは会えないだろうからさ、スイーツでもどう？　とわちゃん、さくらちゃん」
「賛成」
「うん、行こう行こう」
梨っちゃんからそう言い出すなんて、余裕出てきたみたいで良かった。二人ともそう思いながら、久々に三人揃って女子トークに花が咲いた。

年は明けいよいよセンター試験１日目。大雪に見舞われたが梨花は予報を見て前の夜早めに眠り、朝５時には起きて電車の運行状況をチェック。本数削減、大幅なダイ

ヤ乱れと出ていたため、早めに出支度。そして靴底に救急絆創膏をペタ、ペタと貼り付け（雪の日の滑り止めに実際効果がある）、
「じゃあ、行ってきます」
一馬、絵里、友馬は揃って
「行ってらっしゃい。頑張って」
と送り出した。
雪が積もる道を最寄りの駅まで注意深く歩き、駅に着くといつもよりも人が多い。そして電車もなかなか来ない。でも梨花は焦らず待った。幸いにも梨花が受験する会場は、最寄り駅からそう遠くない。一回乗り換えはあるが、両路線とも運転見合わせにはなっておらず、普段よりはだいぶ時間はかかったが、それを見越して出てきたため、開始の 30 分前には会場に到着した。到着後、開始が 1 時間遅れますとアナウンスがあったが、それも想定内。インナーイヤーヘッドフォンで音楽を聴きながら、最終チェック程度に参考書を眺めていた。梨花が聴いていたのは・・フォーレのレクイエムのオッフェルトリウム、サンクトゥス、イン・パラディスムの３つの部分を繰り返して。本来７つの部分から成るが、ひたすら落ち着く部分だけを繰り返していた。受験を前にして”死者のためのミサ”とは、ちょっと変わっているが、落ち着く曲調なのは確かだし、それに・・梨花にとってこの曲は、亡き両親に想いを寄せる特別な曲であったのだ。「パパ、ママ、見ててね。私、奇跡を起こすから」。そういう想いが込められていたのであろう。

さて試験本番。梨花は良いペースで問題を解いていく。そして少々行き詰まると、（問題先送りー♪）と、実に冷静だった。問題先送りとはどっかの国の政治みたいだが、これはかつて、時事問題も取り入れて有紀と二人で漫才ライブしていた頃の名残か。まあ、とにかく余裕ってことだ。そして先送りした問題も、問題文をしっかり読み、出題者の意図を正しく理解し、解答を導く。実に冷静であった。

２日目は昨日の雪が嘘のように晴れ渡った。だが梨花は路面凍結も見越して少し早めに出て、慎重に歩いて行った。そしてその日の試験も実にスムーズに答え、苦手もすっかり克服し、梨花としては最善を尽くした、納得の出来だった。そして・・自己採点は余裕で 900 点超えだった。

そしていよいよ梨花は、京（みやこ）へと乗り込み、とてつもなく巨大な壁に挑んだ。梨花にはもう、怖い物は無い。体調を万全に整えて、入れ込むことなく落ち着いて、ひたすら問題を解く。まるで神懸かっているかように。結果は自ずとついてくる。今は、自分の全てを出し尽くすだけ。そういう境地に達していた梨花は、強かった。

手応えは確かに感じていた。あとはもう、結果の発表を待つのみ。背水の陣で臨んだ梨花の挑戦ははたして如何に。筆者らの頃は合格発表といえば大学正門辺りに掲示され、結果に一喜一憂するドラマが見られたものだが、今はデジタルの時代だ。味気ないとは思うが、それだけのためにもう一度京都に足を運ぶ手間は省ける。そして、友馬、有紀、さくらが見守る中、梨花は合格者の受験番号を検索した。すると・・

梨花は気が抜けたように、机に突っ伏した。後ろで見ていた三人はまさか・・・と一瞬思ったが、
「あった～」

気の抜けたような声で、梨花は確かにそう言った。
「ちょっと梨っちゃん！　一瞬ダメだったのかなって思ったじゃない、もう」
「ごめーん。番号が見つかったら張り詰めていた物が一気に抜けちゃって」
「はー、もう、心配させないでよ、全く」
「ごめーん」
すると突然「パン、パン、パン」と、クラッカーが弾ける音が。
「おめでとー」
みんな口々に梨花を祝福してくれた。そして梨花は満面の笑顔で
「ありがとー」
と答えた。そして梨花は、友馬を突然抱きしめた。
「ちょっと、姉ちゃん、何だよいきなり」
「友馬がひっぱたいてくれなかったら、私は潰れてた。ありがとうね、友馬」
「・・・わ、分かったから、もう離せよ。みんな見てるし、恥ずかしい」
梨花が離れると友馬は、
「その少し前にさ、有紀先輩から姉ちゃんのこと、よく見てやってって電話もらってて、そしたらあの日、母さんに当たったりしてたから、さすがにこれはまずいって思って。もちろん姉ちゃんが体壊したら俺も嫌だったし」
と、ありのまま伝えた。そして梨花は有紀と、そしてさくらと、ハグをして「ありがとう」と気持ちを伝えた。もちろん二人とも、梨花の合格を祝福した。そして梨花はおもむろに・・
「アカネコちゃ～ん　ありがとうね。あと二次試験、余裕だとは思うけど、体調だけは気をつけてね～」
と、そこには居ない茜にもお礼を言った。
「ちゃんと伝えておくよ」
と、さくらは言った

　有紀もまた、志望の国立大学に合格。そして難関私立大学にも合格し、ひたむきにしてきた努力が報われた。茜はもちろん W 大に合格、さくらも第一志望に合格したことが梨花にも伝えられた。そして、卒業式を前にして、登校日に四人が集まった。
「みんな、志望校に合格して、おめでとうだね」
梨花はそう言うと、茜に、
「アカネコちゃん、ありがとうね。ほんと、あのアドバイスは効いたよ」
と言った。それを聞いて茜は、頭を掻きながら照れくさそうに言った。
「おめでとう。でもお礼なら十和田さんとさくらに言って」
「えっ？」
「嶋田さんが京大受験するって決めた時みんなが無謀な挑戦だなんて言ってたのに、十和田さんが嶋田さんを信じるって言ってみんなを黙らせた。って、さくらから聞いた。私はいいなって思ったんだ、そんな友達がいて。だから私は、ちょっと応援してみようって思った。そういうこと」
「でも、あの的確な分析は、私のこともちゃんと見てくれてたって事じゃない。だから、ありがとう」
「あっ、うん」
茜はやっぱりちょっと照れている模様。そんな茜に梨花は
「アカネコちゃん、かわよー（注：かわいい）」
と言って抱きついた。

「ちょっと、何ぃ？」
いきなりのハグに茜は若干パニクっていたが、もちろん悪い気はしていなかった。
「さくらちゃんも。私、直線で鬼脚炸裂させちゃった♪」
「おめでとう。それにしても鬼脚炸裂って、よく覚えたね、そんな用語」
「一夜漬け。でね、当日もパドックで（会場で）、入れ込まないように、気持ち落ち着かせた」
「あはっ、なるほど」
「でさ、さくらちゃん、一つ分からないのがあったんだけど」
「何？　競馬用語なら任せといてよ」
「馬っ気（うまっけ）を出すって、何？」
・・・・・するとさくらは真っ赤になり
「梨花ちゃんってば、知らない！」
と言って梨花を両手で軽く突き飛ばし、走って逃げた。それを見聞きしていた茜はきょとんとしている梨花に小声で、
「あのねぇ、馬っ気を出すってのはね、牡馬が発情して陰茎が勃起した状態（ごによごによごによごによごによごによ）のこと」
それを聞いて梨花も・・真っ赤になった。
「さくら、ぶってるんじゃなくてマジめっちゃ初心（うぶ）なんだから、そういうの無しだよ」
「ごめーん（しゅーん）」
梨花は気を取り直し・・
「とわちゃんも、結局全部合格だね」
「ありがとう」
「で、どこに行く気？」
「そりゃまあ、第一志望の国立だけど・・」
「だよね。私も、奇蹟起こせて良かった～。落ちたら傘貼り（浪人）だったもん」
「あたしはね、奇蹟だなんて思ってないから」
「えっ？」
「梨っちゃんが努力した結果だよ」
茜、そして戻って来ていたさくらも頷く。とその時、後ろにいた数人が代わる代わるに
「嶋田さん、おめでとう。そしてごめんなさい。あの時、茶化したりして」
「おめでとう。ボクもゴメン。自分の成績が上がらなくて焦ってて、京大なんて言えるのが羨ましくて」
「凄いよね。本当に合格して。おめでとう。そしてゴメン」
梨花はそれに答えるように、
「ありがとう。それに、とわちゃんとさくらちゃんが言ってくれたから、全然気にしてなかったもん。さくらちゃんはちょっとスベってたけど」
「梨花ちゃん、それは言わないで」
さくらがそう言うと、皆一斉に笑った。

そして次の日、梨花達は３年間過ごした学舎を卒業していった。

さらにその翌日、有紀は梨花を、近くの広い公園に呼び出した。梨花は京都に行ったら会う機会が減ってしまうので、今日はとわちゃんと楽しもうと、期待して出かけたが、待っていた有紀の表情は、ちょっと険しかった。

「お待たせ。でもどうしたの？　そんな怖い顔して」
「梨っちゃん、ちょっと話があるんだけど」
「何？」
「いいからこっち来て」
普段とても穏やかな有紀があの表情。どうやら嵐の予感が。有紀は公園の、人気の少ないところへと梨花を連れて行き、そして言った。
「いつ言うか迷ってた。言ったら梨っちゃんの受験に影響するかもしれないし、言った方がむしろすっきりして集中できるのかなとも思ったし、どっちがいいのか悩んだよ。でも言えずにいたら梨っちゃんどんどん成績上がって、マジで京大合格も見えてきたから、もうこの際卒業するまでは黙ってようって決めた。で、ようやく言える。このことはちゃんと決着しておかなければいけないと思うの」
だがそう言われても梨花には全く心当たりがない。
「何のこと？」
と、怪訝そうな表情で有紀を見つめた。有紀は大きく息を吐いて、そして切り出した。
「ねえ、梨っちゃん、あんた、あたしに何か隠してるよね？」
「えっ？　・・何もない・・けど？」
「友馬君のことだよ」
「友馬が何？」
「梨っちゃん、友馬君と本当の姉弟（きょうだい）じゃないんでしょ？」
思いもかけないことが有紀の口から飛び出したことに梨花は動揺しつつ、
「な、何でそれ知ってるのよ」
と有紀に問いただし、有紀はそれに答えた。
「一昨年の秋、お爺ちゃんのお墓参りに行った時、たまたま梨っちゃんの姿が目に入って、それで、泣きながらお墓に向かって語りかけているのが聞こえちゃったんだ。で、この１年の梨っちゃんを見て、そうじゃないかって思った」
梨花はしばらく黙り込んだが、重い口を開いた。
「そうだったんだ。でもだったら何？　それがとわちゃんに何の関係があるのよ？」
梨花が強い口調でそう言うと、有紀も強い口調で返した。
「あんたを見てられなかったんだよ！」
そう言われてもまだ、梨花には何で有紀がそう言うのかよく分かっておらず、
「何よ、それ」
と言い返した。有紀は梨花に問い始めた。
「ねえ、梨っちゃんって、２年の終わりまで、あたしと同じようにこっちの国立とかW大とかKO大が目標だったよね。それが何でいきなり京大なの？　それも滑り止め無しだなんて、梨っちゃん、おかしくなったの？　って思ったよ。でも、おかしくしたのはきっとあたしなんだよね」
「えっ？？？」
「あたしが友馬君と知り合って、付き合いだしたから。だから梨っちゃんは友馬君と離れるために遠くの大学を選んだ。勉強勉強勉強で自分を追い込んで、友馬君のこと考えないようにしようとした。違う？」
「何で？　何で私が友馬と離れなけりゃならないの？　言ってる意味が分かんないんだけど」
そう言いながらも梨花は、明らかに動揺していた。
「じれったいわねぇ。梨っちゃんはあたしと友馬君がデートしているのを偵察したり

さ、あたしが友馬君と仲良くなっていくたびに暗くなっていった。梨っちゃんって素直だから、丸分かりだよね。・・・梨っちゃん、あんたさ、友馬君のことが好きなんでしょ？　だから苦しんで、そして諦めて、身を引こうと思った。そうでしょう！？」

　それはほぼ正解であった。遠くの大学に決めたのはまさに友馬と距離を置くため。京大なのはもちろん最先端の研究に興味があったからだが、友馬のことを考える暇もないくらい勉強に打ち込みたかったから。そしてアパートなどを借りなければならないから学費の安い国立を選んで両親の負担を減らしたかったのもあった。

「安心しなよ。友馬君とはそんなに進展していない。あたしの方も受験勉強があるから１年待ってって言ってあるし、何より、受験なんかよりさ、あんたが友馬君のことで苦しんでるの見てさ、ちゃんと付き合えるわけ無いでしょう！？」
梨花は涙目で、そして無言で有紀をじっと見つめていた。しかし、有紀も思い詰めたように言い始めた。
「とは言っても、あたしもずるいよね。梨っちゃんが苦しんでいるの見ていられないとか言って、だったらあたしが友馬君と別れれば・・なんて思ったりもしたけど、あたしだって友馬君のことが好きで、ちゃんと付き合えないとか言いながら、友馬君の気持ちが離れちゃうのは嫌だったし。それに、梨っちゃんがそう決めたなら私は信じるなんてクラスメイトの前で言って、でも・・何で滑り止めすら受けないのって気持ちは残っていて・・。それに、梨っちゃんが自分を追い詰め過ぎちゃった時だって、あたしは何もできなくて、結局友馬君に頼った。ああ、ほんと、嫌になる」
梨花はそれに応えるように・・
「・・とわちゃんは何も悪くない。友馬と別れることなんか無い。だって、友馬はとわちゃんが好きだもん。私はただの姉ちゃん。あと、とわちゃんが私のこと心配してくれていたのにそれをちゃんと聞けなかった私が悪い。ねえ、結局そう言うとわちゃんだって苦しんでたってことじゃない。苦しめたのは私。だから私、全部隠さず言うよ」
梨花は意を決したように続けた。
「去年の雪の日、とわちゃんが友馬と偶然知り合って、友馬は綺麗な人と相合い傘してきたってめっちゃ赤くなってて、それがとわちゃんだって分かって、私は友馬がとわちゃんに傘を返すよう段取りした。私は友馬の恋を応援したかった。まあ、半分面白がってたのはあるけど、そこから付き合いが始まって。でもね、その時は私、友馬のことは、弟としての気持ちしかなかった。二人が付き合い始めてから、少しずつ心が苦しくなっていって、私、友馬のこと、好き、だったんだって、その時初めて気づいたんだよ」
「・・そうだったんだ」
「でさ、友馬がろくでもない女と付き合いだしたら、私は全力でぶち壊すよ。分かるでしょう？」
「・・まあ、梨っちゃんならそうするかな」
「それをしなかったのはとわちゃんだからだよ」
「別に、親友だからって遠慮しなくたっていいじゃない」
「とわちゃんもさ、友馬のことが好きなんだったら、俺には有紀しかいないって、言わせるようになればいいじゃん！　私がぐうの音も出せないほど諦めさせなよ！」
「ああっ、もう。そう言う梨っちゃんだってさ、好きならねえ、奪い返してやるくらい言いなさいよ！」

「違う！！」
ヒートアップし始めた会話を遮る強い言葉に、有紀は一瞬たじろいだ。
「とわちゃんなら私を納得させてくれるって思ったんだよ。とわちゃんには敵わないって思うしさ、とわちゃんなら安心して友馬を任せられるからだよ。だから私は、友馬のことは諦めるって決めたんだよ。だから必死に抑えてきたんだよ、自分の気持ち」
「えっ？」
「そうなんだよ」
梨っちゃん、あたしのことそんなに・・。そう思うと有紀の目にも涙が自然とあふれてきた。有紀は冷静さを取り戻し、穏やかに問いかけ続けた。
「でも、それでいいのって聞いてるの」
「いいよ。だって友馬がとわちゃんのこと好きだってのは紛れもない事実だよ。それに、私が実の姉でないってことは多分今のところ知らないから、私に対する気持ちなんて無いよ」
「そうかなぁ。あたしと会っていても姉ちゃんがさ、とかあのバカ姉がとか、・・あっ、ゴメン。で、けっこう梨っちゃんの話題だよ。それって梨っちゃんのこと意識しているからじゃないのかなって思うんだよね」
「それはさ、とわちゃんと共通の話題にできるからでしょう。それに、もし好きだったとしてもそれは姉として。一人の女としてじゃない」
「そうかな？」
「そうだよ」
「本当？」
「うん。そうか。あの時、突然私もお墓参りに行くなんて言い出さなければ、とわちゃんは私と友馬のこと気づかなかっただろうから、こんなに苦しめちゃうこと無かったんだ。発端はやっぱ私か」
「でもそれは偶然なんだし・・」
「あとね、大事なこと」
「何？」
「私は、友馬と付き合うってのは、今まで育ててくれたお父さん、お母さんに対する裏切りだと思っているの。好きだからって、血が繋がってないからって、やっぱり弟とは付き合えないよ。もう全部友馬に打ち明けて、楽になろうとも、ちょっとだけ考えたし、お母さんは何となく分かっていたみたいで、家を出るなら応援するとも言ってくれてたけど、私はそんな恩を仇で返すような真似はできなかった。だって私は、本っ当に大事にされてきた。それもあってさ。でね、相手が信頼できるとわちゃんだから、私は諦めるって決めたの。可愛いし、優しくて思いやりあるし、嫌味か！っていうくらいいい女だからさ、とわちゃんって。お世辞なんかじゃないよ。本当にそう思ってる。だからさ、お願いだからもう、私の心を揺さぶるのはやめて。そのことはもう、気にしないで。友馬のこと、大事にしてあげて」

それを聞いて有紀はしばらく黙っていた。梨花の養子縁組を解消すれば問題はない。結婚だってできる。でも、姉弟だったってことは周知の事実だし、二人が付き合えばきっと好奇の目を向けられるかも。だとしたら梨っちゃんは、友馬君に嫌な思いをさせたくないってのもあるのかも。そして梨っちゃんのことだから、ご両親に何よりも感謝していて、・・などと様々な考えを巡らせた。

梨っちゃん、切ないね。辛かったね。でもどこまでもいいお姉ちゃんでいようって

決めたんだね。だとしたら・・あたしは・・。
「そっか、・・ごめん・・・ごめんね」
そう言うと、有紀は梨花を優しく抱きしめた。梨花は有紀の腕の中で、しばらく泣き続けた。有紀の腕の中は、とても暖かかった。それは、有紀の思いが梨花に伝わっていたのかもしれない。

そして梨花が泣き止むと、二人はいつもの口調に戻っていた。
「じゃあ、友馬君を諦めたこと、死ぬほど後悔させてあげるからね」
「そっちこそ、友馬よりもず〜っといい男見つけて、見せつけてあげるから」
「あら、友馬君よりもいい男って、相当ハードル高くない？」
「私を誰だと思ってるの！？」
少しの沈黙の後、二人で「ははは・・」と大声で笑った。
「梨っちゃん相変わらずだねえ。その自信はどっから来るの？」
「あー、えっとね、それは、ほら、昔クラスでさ、漫才コンビみたいに言われてたでしょ。私のボケにとわちゃんがツッコミ入れてさ。そのノリ」
「あはは、やってたねぇ」
「思うんだよね。ほら、周りにいる子、思い浮かべてみてよ。普通にしている時よりもさ、笑ったり、ちょっと拗ねたり、可愛い物を見てかわいい〜って言っている時とかの方が、ずっと可愛く見えるじゃない。だから私も、悩んだりくよくよしてないで私らしくしてたら、きっと私のことを可愛いって思ってくれる人、いると思うんだよね。逆にどんなに綺麗でも、いつも怒ってたり人を見下したりしてる人って、全然可愛くないでしょ？　思えば行き詰まっていた時の私も全然可愛くなかっただろうなって思う」
「なるほど」
「だからね、素の私を可愛いって思ってくれる人、きっといるよ、いつか見つかるよ」
「でもさ、友馬君よりいい男とは限らないよ」
「それはさ、私がその人のことを友馬よりもいい男だって思えるようになっていればいいって話でしょう？」
「あーっ、そっか。言えてる」
「だから、友馬のこと、よろしく」
「分かった。諦めたことは死ぬほど後悔させてあげるけど、友馬君の相手があたしで良かったって言ってもらえるようになるから」
「ありがとう。私もいい友達持ったわ」
「今頃分かったの？　遅い！」
そう言いながらも有紀は思っていた。梨っちゃんこそ最高の友達だよ、と。

それからしばらくして、梨花は京都へと旅立って行った。

それからというもの、梨花は忙しい毎日を過ごしていた。難しい講義にノートの整理、レポートの作成など、大学とアパートを往復の毎日。タブレットで記録する学生も多い中、梨花はノートに手書きというアナログ派。手書きの方が身に入ると感じているようだ。そして長時間の筆記でも疲れない万年筆をメインに使い、要点だけ 4 色ボールペンを使ってチェック。それでも、日曜日には東寺の講堂（15 体の国宝を含む 21 体の仏像が創り出す立体曼荼羅で有名）で心を静めたりとか、ちゃんと心と体の休養にも努めている。

ゴールデンウイークの京都は観光客でごった返す。でも梨花は、このときとばかり大阪、奈良・明日香、神戸など、近場で行きたいところへと出かけ、東京とは一味違う西の文化や古の香を満喫していた。そして数日が経つとまた、いつもの生活に戻る。梨花が東京に戻ってきたのは、夏休みに入ってからだった。

そして久々に、親友の有紀と彼氏の友馬。三人で会うことにした。先ずは梨花と有紀が湾岸にある公園のカフェで待ち合わせ、友馬が少し遅れてくるという段取りで。二人は久々の女子トーク。話題は主に、高校時代の友達のこととか。

「さくらちゃん、メガネっ子で可愛い顔してるのに、趣味が競馬の予想ってさ。しかも何でも競馬に例えて、よくスベってたよね」
「なんかねぇ、親が競馬好きで、苗字が有馬だから、名前は桜花賞にちなんでさくらって付けたって話し。で、弟が皐月だってさ」
「うわっ、マジ？　で、大学でもあの調子なのかなぁ」
「何か大学で競馬サークル入って、名前があれだから女神って呼ばれているらしいよ。もっとも予想は全然当たらないらしいんだけどさ、たまにドカンと大当たりしているみたい。元々大穴党みたいだしさ」
「でも私の受験は単勝大穴的中。さくらちゃんのあの時のアドバイス、あれ意外と効いたわ。あと何と言ってもアカネコちゃん。国語が一つの弱点だったのを的確に言い当ててさ。合格できたのはアカネコちゃんのおかげってのもあるからメッチャ感謝してる。で、それにしてもさ、アカネコちゃんも可愛かったよね」
「学年トップの猫耳カチューシャちゃん。大の猫好きで名前が茜だからアカネコって呼ばれてたんだよね」
「猫耳カチューシャ？」
「うん。登下校の時とか、猫耳のカチューシャ付けてたらしい」
「そうだったんだ」
「それでさ、あれ以来時々さくらちゃん、茜ちゃんと会ってるんだけど、茜ちゃん、可愛い顔して結構毒舌なんだよね。そのギャップに萌ぇ〜ってなってさ」
「あっ、いいなー」
「梨っちゃんだって京大なんて行かなければいつでも会えたのに」
「それはもういいから。で、アカネコちゃん W 大行ったんだよね。彼女なら東大でも合格したと思うけど、自由な学風が良かったんだろうね。猫耳外さなくてもいいだろうし」
「いやいやー、結構目立つよ、あれは」
「いいじゃない。うちなんかゴスロリ系ファッションで講義受ける子もいるんだから」
「げっ、それは引く」
「それでいてめっちゃ頭良いの。ちょっと変わってるけど。ってか、変わった人多い」
「あー、昔からそう言われているよね」
「私が一番まとも・・って言っても過言ではないかも」
「・・・」
「ん？　どうかした？　私も変だって言いたい？」
「ううん、梨っちゃんは、真っ直ぐで、思いやりがあって、繊細なくせに芯は強くて、努力家で・・誰よりもいい子だよ。まとも過ぎてかえって怖い・・ってね」
「えーっ、それは言い過ぎだよ」

そう言いながらも梨花は、そう言ってくれたことがたまらなく嬉しかった。
「でもね、私は強くないし、ずるいよ」
「どうしてよ？　ずるいなんて一度も思ったことないけど」
「両親のことだって、高校生になっていきなり本当の親じゃないなんて言われたら、きっとグレてた。そんなの心がもたないよ。でも私は４歳くらいの時に両親を亡くして、親しくしていた今の両親に引き取られた。うっすら覚えていたし、大事にされてたから何でもなかっただけ。あと、それ以前から懐いてはいたけど、友馬もいたし、この家で可愛がられるためには良い子を演じて、友馬にとって良い姉であるべきだって、幼心に思っていた。だからずっと演じてた。それに、死んだ両親のことだって、２年前まで覚えていないふりをしてた。本当はずるい子なんだよ」
「・・・うーん、やっぱ強いよ。それを含めての強さだよ。それに、最初は演じていたって、今ではもう、それが梨っちゃんの人柄・・じゃないの？　覚えていないふりだって、気を遣ってたんでしょう？　そういうのは、ずるいじゃなくて、賢いって言うんだよ」
「うーん、分かんないや。さ、もうこの話はやめよう」

　そしてその時友馬がやってきて合流。三人で他愛もない会話をしながら、海の見えるエリアへと歩いて行った。そして梨花は唐突に、二人に聞いた。

「ところで、もう済んだの？」
「何が？」
「キスだよ。キッス♪」
「梨っちゃん！
　姉ちゃん！　」
「あーっ、二人とも赤くなってる・・ってことは？？」
「怒るよ！　梨っちゃん！」
「キャー、怒らないでー」
真相は不明だが、何やらもう済ませたような雰囲気ではあった。そして梨花は突然真顔になって・・
「それはそうと友馬」
「何だよ、姉ちゃん」
「あんたさ、とわちゃんを泣かすようなことしたらブチ殺すからね」
「おー怖っ」
「とわちゃんも」
「えっ？」
「友馬を泣かせたら絶っ交だから」
「分かってるわよ」
「何だよ、有紀さんは絶交なのに俺はブチ殺すって」
「いいじゃん、細かいこと言わないの。それよりさ、”先輩”からいつの間にか”有紀さん”になってるね」
友馬は赤くなって
「ちょっと、姉ちゃん」
と、少々動揺した様子。すると梨花は
「で、”有紀”って呼べるようになるのはいつかなー」

と、たたみかけ、心の底から笑った。そして振り返って有紀に、
「とわちゃんも、友馬と結婚したら私、姉だからね。今からお姉さんって呼んでくれていいんだよ」
と言った後で、”きゃはは・・”と笑った。有紀は
「はい、お姉様」
と答えた。
「よろしい」
梨花は後ろ向きになってそう言うと、有紀、友馬の横に回り、二人をじーっと見ながら後ろへと回る。そして両腕を後ろで組みながら、二人の十歩くらい後ろを軽やかに歩いた。有紀と友馬は久々に梨花本来の姿を見て安心した。

「友馬君、いいお姉ちゃん持ったよね」
「(振り向いて梨花の方を見ながら)え〜っ、あれが？」
「あのねぇ、素直になりなって。分かってるでしょう？　梨っちゃんほどいいお姉ちゃん、そんじょそこらにはいないぞ」
「・・そんな風に言ってくれる友達を持った姉ちゃんも幸せですよ」
「おっ、言うねぇ。・・それ言える彼氏持ったあたしも幸せだね」
「えっ、俺は、そんな・・」
「あーっ、照れてやんの、照れてやんの」

そのやり取りを見聞きしながら梨花は、少し俯いて、一粒の涙をこぼした。それは梨花の、友馬に対する恋心の、最後の一滴(ひとしずく)なのだろうか。そして梨花は「よかったね、友馬。いい彼女ができて。うん、私はもう大丈夫だから」と、心の中で呟いた。そして、きっとこの二人はうまくいく。そう噛みしめながら、二人の後を軽やかなステップを踏みながら少し離れて見守った。いずれ、友馬が大学に進学する頃には、友馬にも真実が伝えられることであろう。だが、友馬にはとわちゃんがいるし、今の友馬なら、きっとそれを受け入れてくれるだろう。梨花はそう確信していた。

おしまい